県立広島大学人間文化学部紀要　6，157-168（2011）

「グレイの悲歌」解釈試論
――ラッセルにおける表示について――

小　川　吉　昭

1. 序

ラッセルの「表示について」（On Denoting）（1905）(1) は、わずか16ページの、全体で37段落からなる短い論文である。しかし、この論文の中で論じられる「記述理論」は、ラッセルが自身の「最高の学問的業績」(2) と認めたものであり、実際、「哲学的分析のパラダイム」(3) として現代哲学に計り知れない影響を与えてきた。

それにもかかわらず、この論文は、「この二頁余ほど、解釈他者たちを悩ませて来たものは、分析哲学の歴史の中で他に類を見ない」(4) とも、「話がこんがらがってしまい」「およそ理解不可能な個所になっている」(5) とも評される議論を、含んでいる。

本稿の目的は、「グレイの悲歌の議論」と呼ばれるこの議論を、なんとか理解しようとする試みである。

2. 全体の構成

「表示について」の序（<1> ～ <3>）(6) の末尾で、ラッセルは「論述の道筋」を次のように描いている。

> 私の論述の道筋は、次のようになるであろう。まず、自分が唱えようとしている理論を述べることから始める。次に、フレーゲとマイノングの理論を論じ、そのいずれにも満足できない理由を示す。次に、私の理論の背景を示す。そして、最後に、私の理論から導かれる哲学的帰結を簡潔に述べる。（<3>）

この道筋に沿っていけば、序に続いて本論の最初でラッセルが行うのは、「自分が唱えようとしている理論」すなわち「記述理論」（descriptive theory）を述べることである（<4> ～ <9>）。この理論について、ラッセルは、「表示について」の原注１において、かつて自分が『数学の原理』（Principles of Mathematics, 1903）で主張した「フレーゲのものとほとんど同一」の理論とは「まったく異なっている」と述べる(7)。革命的なこの記述理論とは、量化（quantification）の枠内(8) で、「表示句（denoting phrase）が登場するすべての命題を、そうした［表示］句が登場しない形式へと還元する」（<9>）ものである。

次にラッセルが行うのは、「なぜそのような還元をなすことが必要不可欠であるのか」（<9>、cf. <28>）を示すことである（<10> ～ <13>）。それは、「〈文法的に正しいいかなる表示句も対象を表している〉とみなす」（<10>）マイノングの理論が受け入れがたいことを、また、「表示句の内に」Sinn（意義）とBedeutung（意味）という「二つの要素を区別する」（<11>）フレーゲの理論が受け入れがたいことを示すことによってなされる。後者に関しては、ラッセルは、これら二つの要素を「意

味（meaning）と表示対象（denotation）」<11>と名付ける。したがって、「〈表示句は、意味を表し、かつ、表示対象を表示する〉」（<12>）という理論に対してその問題点を指摘することがここでの課題となる(9)。

続いて、ラッセルは、「記述理論の背景」を述べる（<14> ～ <25>）。ここでは、ラッセルは、「論理的な理論は、それがどれだけの難問をきちんと取り扱いうるかによって［その優劣が］テストされる」として、まず、「表示に関する理論であれば当然解決できなければならない」「三つの難問」（<14>）を指摘する（<15> ～ <17>）。すなわち、同一律と排中律と矛盾律とに関わる難問である。その後で、ラッセルは、これらの難問を個々に解決するに先立って、より根源的な難問を取り上げる（<18> ～ <25>）。それこそが、意味と表示対象を区別するフレーゲの理論を巡る問題に他ならない。

> 意味と表示対象との関係は、極めて奇妙な困難を孕んでいる。そして、それらの困難は、もうそれだけで、そうした困難へとつながる理論が誤りとされなければならないことを証明するに十分であるように思われる。（<18>）

最後に、ラッセルは、「記述理論」からの「哲学的帰結」を述べる（<26> ～ <37>）。そこでは、まず、「記述理論」が再度論じられ（<27> ～ <28>）、「〈句そのものは意味を持っていない〉」ことが、「句が登場するいかなる命題においても、その命題は、完全に表現されれば、句を含まなくなる」つまり「句は解体されてしまう」（<28>）ことによって示される。次に、先に示された「三つの難問」が実際に「記述理論」によって解決されることが示される<29> ～ <36>。

こうして、「表示について」は、締めくくりの段落（<37>）をもって閉じられる。

3．論駁の理解の試み

3．1．序

さて、「表示について」で本稿が取り上げようとするのは、「グレイの悲歌の議論」と呼ばれる根源的な問題を扱う箇所（<18> ～ <25>）である。この箇所の議論を〈意味と表示対象を区別することに対する論駁〉と捉えることにしよう。というのも、上述のように、「句そのものは意味を持っていない」（cf.<28>）ことが「記述理論」の「哲学的帰結」（<3>）であるにしても、この箇所では、そうした「帰結」を導くことが主題なのではなくて、それに先だって、〈意味と表示対象を区別する〉ことがいかなる困難を引き起こすことになるかを示し、それによってこうした区別そのものの根を排除することが目指されているように思われるからである。〈意味と表示対象の区別〉に対するラッセルの論駁を、なんとか少しでも理解すべく、見ていくことにしよう。

3．2．議論の土台

ラッセルは、まず、表示句にあっては意味と表示対象が互いに対比されるとする立場を受け入れるとすれば、両者を区別する便法としては「引用符」を用いるのが「ごく自然なやり方」だとして、これを考察の出発点とする。

> 表示句の〈意味〉について語りたいと思う場合に、ごく自然なやり方は、引用符を使用することである。そうすると、次のように言うことになる。

太陽系の質量の中心（the centre of mass of the solar system）は、一つの点（a point）であって、複合的な表示句（a denoting complex）ではない。
「太陽系の質量の中心」（'the centre of mass of the solar system'）は、複合的な表示句であって、一つの点ではない。

あるいは、もう一つ、

グレイのエレジーの第一行目（the first line of Gray's Elegy）は、一つの命題を述べている。
「グレイのエレジーの第一行目」（'the first line of Gray's Elegy'）は、一つの命題を述べてはいない。

こうしておいて、［意味と表示対象を区別するという観点に立った上で、］いかなる表示句つまりCを取り上げるにしても、我々は、Cと「C」との関係を考えてみたいのである。その場合、両者の相違は、上の二つの例で示されたものと同じ種類のものである。(<19>)

ラッセルは、〈Cと「C」との関係〉がここでの検討課題である、という。一見すると、Cは表示句とされているのであるから、ここで検討されるべきは、〈表示句Cとこの表示句に引用符を付された「C」との関係〉、すなわち、〈表示句と意味との関係〉ということになりそうである。しかし、「二つの例」が示している「相違」は、〈表示句〉と〈意味〉の違いではなさそうである。

第一の例に則していえば、〈太陽系の質量の中心〉(the centre of mass of the solar system）という表示句Cが「一つの点（a point)」であるのではなくて、この表示句Cによって指し示されている対象が「一つの点」なのであり、ここでは、表示句によってCによって指示されている対象が一方の項を形成しているのである。そうであれば、ここで検討されるべき課題は、表示句Cの示している対象と、この表示句によって表現されている意味との関係、つまり、〈意味と表示対象との関係〉なのである。

第二の例では、〈グレイのエレジーの第一行目〉(the first line of Gray's Elegy）という表示句Cが「一つの命題」なのではなく、この表示句Cが指し示している対象が、〈The curfew tolls the knell of parting day〉という「一つの命題」なのである。ここでも、表示句Cの示している対象と、この表示句によって表現されている意味との関係、つまり、〈意味と表示対象との関係〉が検討されるべきものなのである。

以上のことは、次の段落の冒頭において、明確に示されている。

我々は、まず、［意味と表示対象を区別する際の上記の仕方を受け入れて、］次のように言っておく。すなわち、［命題の中に］Cが登場する場合には、それについて語っているのは、〈表示対象〉である。これに対して、「C」が登場する場合には、〈意味〉である、と。さて、［しかし、意味と表示対象を区別する限り、］意味と表示対象との関係は、句によって示されるような単なる言語的な関係ではない。すなわち、［そこには、］ある論理的関係が含まれている［ことになる］はずである。この論理的関係を、〈意味は表示対象を表示する〉(the meaning denotes the denotation)と言うことによって表現する［としよう］(10)。しかし、そうすると、［第二に、］我々はある困難に直面することになる。すなわち、〈意味と表示対

象との結びつきを保持し、なおかつ、両者が一にして同じものとなることを防ぐという、両方を［同時に］達成するわけにはいかない〉という困難に。また、［表示対象が表示句による以外には示されないのと同様に、］〈意味は、表示句による以外には接近不可能である〉という困難に。このようなことが起きる次第は、以下の通りである。(<20>)

〈Cと「C」との関係〉とは〈意味と表示対象との関係〉であり、この関係をラッセルは「論理的関係」と呼び、〈意味は表示対象を表示する〉と表現する。そして、この意味と表示対象との関係を考えようとすると、ただちに「困難」が生じることを指摘する。

ラッセルが指摘する困難は二つであると考えられる。ひとつは、〈意味〉が表示するものであり、〈表示対象〉はこの〈意味〉によって表示されるものであるとすれば、当然、両者は互いに異なるものとみなされることになる。これは、もともと、〈意味〉と〈表示対象〉が表示句Cの二つの異なる要素として定位されたことからして、当然のことである。ところが、ラッセルによれば、このように〈意味〉と〈表示対象〉とを異なるものとして区別しようとしても、どうしても「両者が一にして同じものとなる」ことを防ぐことができない、というのである。

この困難を、暫定的に、「表示句－意味－表示対象の蹉跌」と呼ぶことにしよう。表示句Cが〈意味〉と〈表示対象〉という二つの要素を持っているとしても、その表示句が命題の中に登場するとき、〈意味〉と〈表示対象〉を区別し続けることができないことを表現するために。

もうひとつは、「意味は、表示句による以外には接近不可能である」ということである。おそらくは、これは、〈表示対象が表示句による以外には示されない〉ということと対をなすものである。これらのいずれも、困難といわれるべきものではないように思われる。〈意味〉にしろ〈表示対象〉にしろ、どちらも表示句Cの要素である以上、それらが表示句によって示されるのは当然のことだからである。そして、〈意味〉と〈表示対象〉を示すものが表示句C以外にはありえないとしても、表示句C以外に〈意味〉と〈表示対象〉を示すものの可能性を検討する必要があるとも思えないからである。

しかし、〈意味は表示対象を表示する〉と言われた瞬間に、表示句Cが姿を消していることを思い起こすならば、ここで言われていることが何らかの困難となるのは、表示句Cを抜きにしては〈意味〉について語ることも〈表示対象〉について語ることも出来なくなる、ということではないだろうか。表示句Cを抜きにした場合の困難を表すために、第二の困難を、これまた暫定的に、「意味－表示対象の蹉跌」と呼ぶことにしよう。

前者の困難は<21>において論じられ、後者の困難は<22>～<24>において論じられる。

3．3．表示句－意味－表示対象の蹉跌

我々は、上で、ラッセルが指摘する最初の困難を「表示句－意味－表示対象の蹉跌」と呼んだが、それは、〈表示句は、意味を表現し、さらに、その意味が表示対象を表示する〉という二段構えの構図(11)が破綻する、ということを言いたいわけではない。ただ、表示句において意味と表示対象を区別することにした場合、区別されるべき意味と表示対象との差異が曖昧になってしまう、ということを言いたいだけである。

［フレーゲによれば、］一つの句Cは、意味と表示対象の両方を持つのでなければならなかった。しかし、［〈表示句Cの意味〉を念頭に置いて］「Cの意味」(the meaning of C)と言っても、［意味と表示対象とを表記し分ける上述の約束に従えば、Cに引用符がついていないのだから、］この言い方が与えるのは〈表示対象の意味〉（もしあればの話だが）になってしまう。

［例えば、C＝the first line of Gray's Elegyとすると、］「the first line of Gray's Elegyの意味」［について語ろうとしても、この表現］は、［the first line of Gray's Elegyという表示句によって表示されている対象が〈The curfew tolls the knell of parting day〉という命題である以上、］「The curfew tolls the knell of parting dayの意味」と同じものとなってしまう。そして、これは、［当初我々が意図していた］「the first line of Gray's Elegyの意味」と同じものではなくなるのである。そうすると、我々が欲している意味［＝表示句Cの意味］を手に入れるには、「Cの意味」と言ってはならず、「「C」の意味」と言わなければならないことになる。［しかし、このように言うと、表示句Cによって意味されているものを示すことになるから、］これは、単独の「C」と同じものになってしまうのである。同様に、［表示句Cの〈表示対象〉を念頭に置いて］「Cの表示対象」［と言うと、これ］は、我々が欲している表示対象を意味するのではなくて、我々が欲している表示対象［表示句Cが表示している表示対象］によって表示されるものを表示する何か（とにかくそれが表示するとして）を意味することになる。例えば、「C」を［<19>に掲げた］「上記第二例に登場する複合的な表示句」（the denoting complex occurring in the second of the above instances）とせよ。そうすると、

C＝「the first line of Gray's Elegy」

であり、

Cの表示対象＝The curfew tolls the knell of parting day

となる。しかし、我々が表示対象として持とうとしていたのは、「the first line of Gray's Elegy」であった。こうして、［表示対象に関しても、］自らが欲したものを手に入れることに失敗するのである。（<21>）

表示句Cが意味と表示対象という二つの要素を持つのであれば、どちらか一方の要素を話題にして、「表示句Cの意味」あるいは「表示句Cの表示対象」ということができるはずである。そしてCが表示句の記号である以上、表示句Cとは畳語であって、Cと表記するだけですむはずである。そうであれば、「表示句Cの意味」あるいは「表示句Cの表示対象」から表示句という表現を取り除いて、「Cの意味」あるいは「Cの表示対象」ということができるはずである。ところが、このような表現を命題の中で使用した途端に、これらの表現によって言い表されるものがずれてしまうというのである。

(1)　C――意味　：「C」
　表示句
(2)　C――意味　：　?
　表示対象

(3)　C――表示対象　：　C
　表示句
(4)　C――表示対象　：　?
　表示対象

このずれは、一方では、Cを表示句とし、他方では、それが命題の中に登場する場合にはそれによって表示される表示対象とする、ということに起因する。すなわち、〈Cの意味〉をひとまとまりの句として捉えることと、〈C〉の〈意味〉と分離して捉えることに起因する。同様に、〈Cの表示対象〉をひとまとまりの句として捉えることと、〈C〉の〈表示対象〉と分離して捉えることに起因する。Cが命題の中に登場する場合にはそれが表しているものは表示対象であるとすれば、〈C〉の〈意味〉とは〈表示対象の意味〉という正体不明の何ものかということになり、〈C〉の〈表示対象〉とは〈表示対象の表示対象〉という、これまた正体不明の何かとならざるをえないのである。そうであれば、ラッセルが第一の困難を「我々は、意味と表示対象との結びつきを保持し、なおかつ、両者が一にして同じものとなることを防ぐという、両方を達成するわけにはいかない」と言うとき、その「一にして同じもの」とは、表示句Cとその二つの要素つまり〈意味〉と〈表示対象〉という構図の中には位置づけられえない、〈正体不明の何ものか〉ではないだろうか。

3．4．意味－表示対象の蹉跌

次に取り上げられる困難は、先に我々が「意味－表示対象の蹉跌」と呼んだものであり、「意味は、表示句による以外には接近不可能である」（<20>）というものである。この困難について、ラッセルは、これまでの議論をまとめたうえで、次のように論じていく。

> ［以上をまとめると］複合的な表示句の〈意味〉と言う場合の困難は、次のように述べられるであろう。すなわち、複合的な表示句［C］を命題の中に配置した瞬間に、その命題は、［表示句そのものについて述べた命題ではなくて、］〈表示対象〉について述べた命題となる。そして、主語が「Cの意味」となる命題を作ろうとすると、その主語は、［表示句の意味ではなくて、］表示対象の意味（もしあればの話だが）となってしまう。しかし、これは［当初］意図していた事柄ではない、と。以上のことは、我々を次のように言うようにと導く。すなわち、［表示句が意味と表示対象という二つの側面を持つという構図全体をいったん棚上げにして、意味と表示対象とだけに注目し、］意味と表示対象とを区別する場合、［不可避的に］《意味が表示対象を持っており、その意味は複合体である》（the meaning has denotation and is a complex）と［でも］言うほかない、そのような意味を取り扱わざるをえない。そして、複合体と呼ばれうると同時に、意味と表示対象の両方を持つと言われうるものとしては、意味以外の何かがあるわけではない［つまり、意味から独立して表示句なるものがあるわけではない］、と。当該の観点に関して、正しい言い方となると、〈ある意味は表示対象を持っている〉（some meanings have denotations）ということになる［他ないのである］。（<22>）
>
> しかし、ここに述べたことは、意味について語る際に我々が直面する困難をより明らかなものとするだけである。というのも、［以下の理由による。すなわち、］Cが我々の［取り上げている］複合体だとせよ。そうすると、［<22>の結論を受ければ、］〈Cこそがその複合体の意味である〉と言わなければならないはずである。［そうすると、以下Cという表現は、これまでとは違って、意味ということになる。］それにもかかわらず、引用符なしに［意味］Cが登場する時はいつでも、それによって言われていることは、意味について当てはまるのではなく、［命題の中に登場するCは表示対象を表すということまでは否定されていないとすれば、］ただ表示対象について当てはまるだけである。〈太陽系の質量の中心は点である〉と言う場合がそうであるように。そうすると、Cそのもの［すなわち、意味］について語る

ためには、つまり、意味についての命題を作るためには、我々の作る命題の主語はCであってはならず、〈[意味] Cを表示する何か〉でなければならないことになる。そうすると、「C」は、我々が意味について語りたい際に使用する［ことに決めておいた］ものであるのだが、意味であってはならず、〈意味を表示する何か〉でなければならないことになるのである。しかも、Cは、この複合体の構成要素（「Cの意味」（the meaning of C）の場合がそうであるように）となってはならない。というのも、Cが複合的な表示句の中に登場すると、登場してくるのは表示対象であって意味ではなくなるし、いかなる対象も、無限に多くの異なった表示句によって表示されうるが故に、［そこに登場している］表示対象から［特定の］意味へと戻る道筋はないからである。（<23>）

<22>段落の冒頭で<21>段落の議論をまとめたうえで、ラッセルは、新たに、有望と思われる考えを取り上げる。その考えとは、「〈ある意味は表示対象を持っている〉」というものである。これは、表示句・意味・表示対象という構図の中からいったん表示句を棚上げにして、意味と表示対象にだけ着目するというものである。しかし、この新たな考えを採用したとしても、「意味について語る際に我々が直面する困難をより明らかなものとするだけである」（<23>）と述べられているように、結局は抜き差しならない困難に直面することになる、というのである。その経緯は、次のように論じられる。

まず注意すべきは、これまでの議論においては、Cは表示句を表す記号としては用いられていたが、ここでは、それとは異なって、Cが表示句を表す記号としては用いられなくなる、という点である。「Cが我々の［取り上げている］複合体だとせよ」という指令が要求しているのは、Cを複合体である〈意味〉を表すものとして扱え、ということであると考えられる。

しかし、命題の中に登場するCは表示対象を表すという先の約束が生きている限り、Cを主語とする命題は、〈意味〉を主語としているのではなくて、〈表示対象〉を主語とするものになってしまう。したがって、「意味についての命題」を作ろうとすれば、その命題の主語は、「Cであってはならず、〈[意味] Cを表示する何か〉でなければならないことになる」わけである。

そのような〈何か〉としてただちに思い当たるのは、引用符付きの「C」であろう。なぜなら、表示句の〈意味〉と〈表示対象〉を区別し、意味を表すために採用されたのが、引用符を付すことだったからである。しかし、今や、〈意味〉を表すものとしてCが用いられているのであるから、「C」そのものは、もはや、「意味であってはならず、〈意味を表示する何か〉でなければならない」ことになるというのである。

「C」――C――表示対象
　　意味

〈意味〉を表すものとしてもはや「C」が役に立たないからといって、「Cの意味」（the meaning of C）という表現に頼るわけにもいかないであろう。なぜなら、そうすることは、〈Cの意味〉から〈C〉の〈意味〉へと進んだ先の議論を蒸し返すことになるからである。すなわち、「Cの意味」と言った途端に、このCは〈表示対象〉を表すことになるからである。そして、例えば、Cが金星という〈表示対象〉であるとすれば、金星を表す表示句としては、ただ「明けの明星」があるだけではなく、「宵の明星」もあるのだから、金星からどちらの表示句へ進むべきかが一義的に決定されることはありえない。そして、「明けの明星」という表示句に進んだ場合にこれによって表現される〈意味〉は、「明けの明星」という表示句に進んだ場合の〈意味〉とは異なるのであるなら、結局は、「表示対象から［特

定の］意味へと戻る道筋はない」とせざるをえないことになるのである。

3．5．評価

ラッセルの眼目は、表示句Cの二つの要素について、「Cと「C」との関係」（<19>）を考えてみるというものであった。この関係は「意味は表示対象を表示する」と表現された。そこでは、意味と表示対象とが表示するものと表示されるものとして区別されていた。しかし、上述のように二つの困難が解決不可能なものであるとすれば、そこから導き出される結論は、これらの困難が生じてくる根を断ち切ることではないだろうか。そして、ラッセルは、<24>と<25>でそうした結論を主張しているのではないだろうか。

ところがこれら二つの段落を二つの困難が解決不可能であることからの結論と解釈しようとすると、何かしっくりこない印象を抱かざるをえないのである。この違和感は、次に見るように、<24>の書き出しにある「そうすると」が、第二の困難を引き継いでいることからくる。

> そうすると、[次のようにならざるをえない。すなわち、]「C」がCを表示するというように、「C」とCとは異なった存在者であるように思われるかもしれない。しかし、これでは説明になりえない。なぜなら、「C」とCとの関係がまったくもって神秘的なままだからである。つまり、［このように説明するなら、］Cを表示しうる複合的表示句「C」を我々はどこに見出しうるのであろうか。さらにいえば、Cが命題の中に登場するとき、登場するのは表示対象だけではない（次の段落でみるように）。しかし、[「C」とCとを異なった存在者とみなす]当該の観点に立てば、C［の持っている側面］はただ表示対象であるだけで、意味の方はといえば、まったくもって「C」に帰属させられているのである。こうなると、解きほぐすことのできないもつれであって、〈意味と表示対象との区別全体は誤解され続けてきた〉ことを証明しているように思われるのである。（<24>）

すなわち、この段落の書き出しの「そうすると」が二つの困難全体に関するものであるとすると、「「C」がCを表示する」とは、〈意味は表示対象を表示する〉という意味と表示対象との関係を表していることにならざるをえないであろう。そうすると、この関係においては、繰り返しいえば、〈意味〉は表示するものであり、〈表示対象〉はそれによって表示されるものであるから、「「C」とCとは異なった存在者である」とするのは至極当然のことである。それにもかかわらず、ラッセルは、両者の「関係がまったくもって神秘的なまま」だと言うのである。その理由は、「Cを表示しうる複合的表示句「C」」がどこにも見出されえないということである。そもそも表示対象を表示する表示句は、Cとされていたのではないか。いったい何が神秘的なのだろうかという当惑に陥らずにはいられなのである。

しかし、この当惑は、「Cを表示しうる複合的表示句「C」」という表現を読み間違ったが故の当惑ではなかろうか。ここでCを表示するものとして挙げられているのは〈表示句C〉ではなく、引用符を付された〈複合的表示句「C」〉である。この〈複合的表示句「C」〉が登場するのは、第二の困難を巡る議論においてであった。このつながりを重視すると、書き出しの「そうすると」は、二つの困難についての議論全体を受けているのではなくて、第二の困難についての議論だけを受けていると解釈せざるをえない。

この立場からすれば、ここでのCは、表示対象を表しているのではなく、意味を表していることになる。そうすると、「C」は、先に〈意味を表示する何か〉と言われていたものに他ならない。そのような何かをどこにも見出しえないことは、すでに第二の困難において論じられていた事柄である。

ここまでは、Cを意味とした場合の議論である。ところが、段落の後半になると、ラッセルは、命題の中に登場するCは表示対象を表すという最初の約束に戻っている、と解さないわけにはいかない。これは、第二の困難を見たときにも示されていたことである（p.8）。そして、この約束が生きている限り、「Cはただ表示対象であるだけ」であって、表示句の意味を表すためには「C」が不可欠なのである。

この二つの事態が引き起こすのは、不可欠な「C」がどこにも見出されえない、という困惑である。ラッセルが「解きほぐすことのできないもつれ」に陥ると指摘しているのは、この事態なのではないだろうか。第一の困難から導かれた〈意味が表示対象を表示する〉という見方が、最初の意味と表示対象との区別と折り合わなくなる事態である。ここから、意味と表示対象という二つの要素を区別する「〈意味と表示対象との区別全体は誤解され続けてきた〉ことを証明しているように思われる」と、ラッセルは言うのである。

ところで、この主張は、上に見たように、第二の困難に関する議論から得られたものである。この主張だけでは、〈意味が表示対象を表示する〉という見方を撤回して、議論の出発点に戻る道筋が残されている。しかし、出発点に戻るだけでは、第一の困難に直面するだけである。第一の困難を引き起こす根を取り去るために、ラッセルは、出発点に戻って、もう一度第一の困難を取り上げ、次のように論じるのである。

> 表示句が命題に登場するときには表示句の意味が重要な価値を持っていることは、形式的には、ウェーヴァリの著者をめぐる難問によって［すでに］証明されている。「スコットはウェーヴァリの著者であった」（Scott was the author of Waverley）という命題は、「スコットはスコットであった」（Scott was Scott）という命題が持っていない特性を持っている。すなわち、それが真であるかどうかをジョージⅣ世が知りたがったという特性を持っている。そうすると、これら二つの命題は同一の命題ではないことになる。したがって、「ウェーヴァリの著者」の意味は表示対象と同様に、重要な価値を持っているのでなければならない。［もっとも、このように言うのは、］この［意味と表示対象という］区別が帰属する［＝そこから出てくる］観点を我々が墨守するならば［という留保を伴ってのことではあるが］。しかしながら、たった今みたように、この観点を墨守する限り、〈表示対象だけが重要な価値を持ちうる〉と主張せざるをえなくなるのである。そうすると、当該の観点が［そもそも］破棄されなければならない［という結論にならざるをえない］。（<25>）

ジョージⅣ世が知りたがっていたことが「スコットはウェーヴァリの著者であった」であるなら、「ジョージⅣ世は・・・を知りたがっていた」の空欄に、「スコットはウェーヴァリの著者であった」を代入することができる。そして、「ウェーヴァリの著者」という表示句が表しているのはスコットという詩人である。つまり、〈ウェーヴァリの著者〉＝スコットである。そこで、「スコットはウェーヴァリの著者であった」という表示句の〈ウェーヴァリの著者〉の箇所にスコットを代入する。すると、この代入の結果は、「スコットはスコットであった」となる。この結果で「ジョージⅣ世は・・・を知りたがっていた」の空欄を補充すると、「ジョージⅣ世はスコットはスコットであったということを知りたがっていた」となる。しかし、これはジョージⅣ世が知りたがっていたことではない。

以上の操作は、「ウェーヴァリの著者」という表示句の表示対象にだけ注目したものである。そのため、ジョージⅣ世が知りたがっていたことにずれが生じたのである。そのずれがはっきりするのは、表示句の意味を考慮に入れるときである。しかし、表示句〈ウェーヴァリの著者〉は、引用符を伴わ

ない限り、表示対象を表現するだけであり、意味を指示することはない。このことは、先に、〈Cの意味〉を〈C〉と〈意味〉に分断することによって明らかにされたことに他ならない。つまり、表示句が意味と表示対象という二つの異なった要素をもつとしても、この表示句を使用する段になると、「〈表示対象だけが重要な価値を持ちうる〉」とせざるをえず、上述のずれ、すなわち、第一の困難を引き起こさざるをえないのである。

ここから、ラッセルは、表示句において意味と表示対象とが区別されるという「当該の観点が［そもそも］破棄されなければならない」と結論づけるのである。

4．おわりに

こうしてみると、「〈表示対象だけが重要な価値を持ちうる〉」との「主張」は、「表示について」におけるラッセルのものではない。このような主張へと導く「観点」そのものをそもそも「破棄」することこそが、ラッセルが到達する結論なのである。そして、この「観点」とは、意味と表示対象との「区別が帰属する観点」である。さらに、意味と表示対象とが「区別」されるのが表示句であるかぎり、「破棄」されるべきは表示句そのものなのである。

5．注

（1）B. Russell, 'On denoting' (in "Logic and Knowledge", ed. by R.C. March, 1956, George Allen & Unwin. pp.41-56)

（2）三浦俊彦、『ラッセルのパラドクス』、2005年、岩波新書、p.98。

（3）三浦、同書、p.99。飯田隆、『言語哲学大全Ⅰ――論理と言語――』、1987、勁草書房、p.150。

（4）飯田、同書、p.187。「空な確定記述は意味meaningを有しはするが表示対象denotationを有しないというフレーゲ的立場を、ラッセルが最終的に放棄した理由は、『表示について』で明示的に述べられている限りでは、その四八頁から五〇頁にわたっての議論の中に含まれていると考えられる。しかしながら、『表示について』のこの二頁余ほど、解釈他者たちを悩ませて来たものは、分析哲学の歴史の中で他に類を見ない。」

（5）戸田山和久、「Ⅲ　ラッセル」（飯田隆編、『哲学の歴史 第11巻 論理・数学・言語【20世紀Ⅱ】』、2007、中央公論社）、p.227。「ラッセル自身は普通の引用符を使ったために話がこんがらがってしまい、『表示について』でこのことを扱っている議論（『グレイの悲歌の議論』と呼ばれる）は、およそ理解不可能な個所になっている。」

（6）「表示について」からの引用は、以下、段落番号を<　>で示し、本文に記す。なお、全角の〈　〉は、文意を通し易くするために筆者が加えたものである。また、段落ごとに引用する際に頻出する［　］は、訳出に際して、読み込みすぎかと恐れながらも筆者が付加したものである。

（7）飯田によれば、『数学の原理』と「表示について」との間には、「表示について」の半年前に発表された「命題の存在論的含意 The existential import of propositions」という覚書風の論文があり、「そこで取られている立場は、実は、『表示について』でフレーゲの立場として批判されることになるものに他ならない」とのことである。（飯田、同書p.185～186参照。）とすれば、「表示について」はフレーゲ批判であると同時に、否、何よりもまずラッセルの自己批判の論文ということになるであろう。

また、飯田は、次のようにも述べている。「『表示について』の中で、ラッセルが、フレーゲの理論（と

かれが信じたもの）を批判するときに、かれが集中したのが、〈表示句の意味 meaning がその表示対象を表示 denote するという関係〉であったこと、また、その批判の対象となった理論がラッセル自身が以前に取っていた理論とほぼ同じものであると言われるいること等を考え合わせるならば、『表示について』の中で批判の焦点となっている関係は図式Ｉの下半分に登場していたものであると結論できるであろう。」（飯田、同書、p.231）

ちなみに上記引用箇所で「図式Ｉ」と呼ばれているのは、次のものである（飯田229頁）。

図式Ｉ

表示句 ——→ 表示概念 ——→ 対象

指示indicate（心理的）　表示denote（論理的）

（８）飯田、同書、150頁。

（９）前注7で「表示句の意味 meaning がその表示対象を表示 denote する」と述べられている事柄と、ここで「表示句は、意味を表し、かつ、表示対象を表示する」と述べられている事柄とは同一ではない。飯田は、前者を図Ｉとして示したが、後者は次の図IIによって示している（飯田、同書、p.230）。

図式II

表現express

表示句 ——→ 表示的概念（＝意味meaning）

↓ 表示denote

表示句 ——→ 表示対象denotation

表示denote

(10) この「論理的関係」については、飯田、同書、p.163 ～ 164が参考になる。

(11) 前注７に引用した、飯田の図式Ｉを参照されたい。

Abstract

An Essay of Gray's Elegy Argument - A interpretation of Russell's 'On Denoting' -

Yoshiaki OGAWA

Gray's Elegy Argument has been regarded not only as the most puzzling passage in 'On Denoting', but as the greatest riddle within the field of Analytic Philosophy, which racks every interpreter's brain. But it is not impossible to realize the Argument consistently if we take notice of the two difficulties which Russell points out in paragraph twenty. The first difficulty consist in the distinction between meaning and denotation in a denoting phrase, and the second in the relation of meaning and denotation. The phase contrast of these two difficulties can make clear the equivocality of the symbol C, that C stands for denoting phrase in the first phase, and, on the contrary, that C stands for meaning in the second phase.